

小笠原村立小笠原中学校令和4年度授業改善推進プラン

小笠原村立小笠原中学校
校長 椎橋 秀行

(1) 令和3年度の取り組み状況に関する総括

①令和4年度の全国学力調査における生徒質問紙から、肯定的な回答が全国平均を上回った項目は「学校に行くことが楽しい」「困りごとや不安があるときに、学校や先生にいつでも相談できる」などがあげられる。

さらに否定的な回答がゼロだった項目に「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」「友達と協力するのは楽しいですか」などがある。このことから学校の教育活動、教員との関係、生徒集団は、望ましい人間関係が築かれていると考えられる。

②令和3年度の保護者アンケートでは、肯定的評価が昨年度より5.0%以上上昇した項目として、「英会話能力を高めるために、ネイティブイングリッシュティーチャーによる授業など、授業を工夫している」「総合的な学習の時間等で小笠原の特徴を生かし、地域と連携した活動が進められている。」等の項目があげられる。しかし「教員は生徒が授業内容を理解できるよう、指導方法や教材研究、授業改善に取り組んでいる。」に対する肯定的な回答は減少している。

③小笠原村学力調査においても、観点別正答率をみると、1・2年は多くが全国平均値を超えているものの、3年になると下回っている。令和3年度は、2・3年で下回っているものが多くみられた。

④以上の状況をふまえ、地域の中にある学校として、地域と連携しながら学習を進めるなかで、基礎的基本的な学力や、学習習慣の定着が必要である。そのための授業改善を図る。

(2) 授業改善のための取組について

①課題の要因

令和4年度「東京都児童・生徒の学力向上を図るための調査」においても、各教科の理解の程度を全校平均と比べてみても、5教科のうち国語以外は「どちらかといれば分からない」「ほとんど分からない」の否定的な回答が上回っている。

また、令和4年度の全国学力調査における生徒質問紙から、課題の要因となる事項には、「学校の授業以外の学習時間」「新聞の読むや蔵書数」などの家庭に比重がかかる要因以外に、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」「自分の考えをまとめる活動」などに積極的に取り組めていなかった回答が読み取れる。

②学校全体で取り組む事項

小笠原村教育委員会教育目標実現のための授業改善に関する取組の重点である「授業UDの徹底」に向けて「わかる」から「できる」を体感する授業の推進するために以下のように改善する。

- ・「わかりやすい授業」はもちろん、「学びに向かう力」の強化を図り、主体的に学ぶ生徒の育成を図る。定期テスト前でなく、自ら学習計画を立て、自身の学習計画を修正しながら自身の力でやり遂げられるように、自己マネジメント力の育成を図る。そのためには、家庭学習も意識したノートやワーク等の記録、自らメモなどを取らせるなどの工夫を含めた授業展開をさせる。

- 指導と評価の一体化の視点から、少人数での授業の利点を生かし、理解不足の内容に関しては、再度復習から入るなど、生徒の理解度の把握に一層努めさせる。また、個に応じた指導に対応するため、それぞれの理解度の把握とともに、スモールステップの目標設定など、対処の仕方について指導させる。
- 「わかった」満足感や「できる」達成感を体感できることによる学習効果を向上させるために、目的意識を明確にし、生徒の関心・意欲が高められるよう、実態を踏まえた授業改善を推進する。自分の考えや意見をグループや学級で発言したり、他の生徒の思いを知ることから考えがさらに醸成されているか、指導者に常に意識させる。授業を通じて、そういった場面を創り出させる。
- 小学校との教科の系統性を踏まえた年間指導計画を下に、より学習効果が高まるように工夫する。教師の指示や友達の発表を聞く場面は、教師はしっかり聞いていればわかると安易に考えず、耳で聞いて理解することが苦手な生徒、目で見えて理解することが得意な生徒など、様々な生徒がいる中で、ICT機器を活用しながら、視覚情報などを上手に使いながら授業づくりをさせる。
- 「読む力」「読み取る力」を意識した課題や授業内容の工夫と、朝読書や図書館利用に向けた指導、読書に関連したビブリオバトル等の実践も視野に入れながら、読書活動を活発にしていく。また、資料を読み取る力は、ICT機器をさらに活用し、情報を取捨選択させるのみならず、その出典などにふれながら、その信憑性を確かめる指導を行う。